

日本IT書紀

036 大正デモクラシー

03 未剖篇
卷之四 曙光

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第三十六

大正デモクラシー

一

一九一八年七月二十三日、富山県魚津に端を發した米騒動は、八月十二日、神戸市に飛び火した。三菱造船所の労働者八千人が蜂起し、鉄棒やレンガを使って工場の購買部倉庫を破り、機械装置などを破壊したのだ。夜になると市民三万人が加わり、いったん湊川公園に集まったあと、鈴木商店の打ちこわしに走った。

鈴木商店は後藤新平と親密な関係にあつて、台湾の利権でのしあがった。米七十一万俵を輸出し巨利を得たほか、寺内内閣では外米、朝鮮米の買付け指定商人となつていた。こうしたことから、市民が「米商人」として思い浮かべる筆頭にあつた。

「報知新聞」の特派記者として米騒動の様子を取材してゐた新聞記者がいた。その記者の名は鈴木茂三郎といつた。一九一三年（明治二十六）、愛知県蒲郡の貧しい人力車夫の家に生まれた。一九二二年（明治四十五）に東京に出て、

人力車製造業で小僧として働き、働きながら早稲田を出て新聞社に入った。

その取材遍歴がすごい。

ロシア革命（一九一七年）

米騒動、シベリア出兵（一九一八年）

朝鮮万歳事件（一九一九年）

原敬暗殺（一九二二年）

日本共産党結成（一九二二年）

関東大震災（一九二三年）

治安維持法公布（一九二五年）

金融恐慌（一九二七年）

初の衆議院議員普通選挙（一九二八年）

と、二十世紀初頭の大事件にことごとく関わっている。

鈴木の能力ばかりでなく、記者の数が限られていて、一人で何役もこなさなければならなかつた、ということである。であるにしても、大正期の激動に立ち会つた伝説の人物であることに違いない。

第二次大戦後、一九四六年に衆議院議員となり、一九五一年から五九年まで日本社会党委員長を務めた。

その鈴木が、神戸騒動の模様を書き残している。

栄町四丁目の鈴木商店の元本宅が焼かれ、細民をいじめ

つけていた貸家管理所の兵神館、鈴木の兵庫精米所が焼かれ、鈴木の子新聞「神戸新聞」の三層楼が焼け落ちた。

群集は、建物の前を遠くからかこんで、石を投げつけている。するとガラスとガラスが破れて落ちる。電灯が消える。二つ三つの黒いかたまりが鉄砲玉のように飛び込んだと見るまに、なかから格闘らしい雄叫びの音が聞える。

「やれッ、やれッ」

と群集がどなり合う。まもなく建物のなから真赤になつて燃え上がった。

十三日になつて兵庫県知事は陸軍姫路師団に出勤を要請、かつ警官に「抜剣差支えなし」の許可を出した。斬つてもいい、というのである。

暴徒と化した民衆と警官・歩兵隊との衝突は十四日になつても収まらなかつた。県当局は遂に市民に外出禁止令を出すとともに、軍隊の増派を要請した。警察、軍隊との衝突による死者は、確認されただけで四名を数えた。

以後、八月十三日・大阪、十四日・東京と続き、十七日に山口県宇部で発生した騒動で、鎮圧に出勤した軍隊がついに実弾を発砲した。死者十三、重傷十五を出し、十七日から二十日夜に起こつた静岡の暴動では死者二、負傷數十

名が出た。

宇部の騒動については次のような記録が残っている。

坑夫軍のほうでは「日本軍が日本人を撃つわけがない」といつて突進した。両軍の先頭どうしの距離わずか一間。実に息つまるような光景であつた。坑夫軍の正當かつ正直すぎる確信にもかかわらず、軍隊は実砲をぶつ放した。

一間、つまり二メートル足らずの至近距離から実弾を発射されてはたまらない。死者十三、重傷十五が出た。文面以上に阿鼻叫喚の光景が展開されたに違いない。朝鮮でも、もう一つの米騒動が起つていた。

大日本帝国政府は日本国内での米不足や陸軍の食料調達需要を満たすため、朝鮮で「産米増殖計画」を推進し、半島南部の農村部に多額の資金を投下して土地改良や農業技術教育などを行つた。

その結果、朝鮮における米の生産量は大幅に伸びた。にもかかわらず、大半が日本列島に運ばれて行つた。これが反日感情を刺激し、抗日独立運動につながっていく。大日本帝国政府は国内における批判勢力や朝鮮独立運動に対して共通に軍事的武力圧力で鎮圧することになつた。

かつての新左翼風という

——権力がその本性をむき出しにした。
ということになろうか。

市民運動を力でねじ伏せたという意味で、米騒動は、市民生活に官憲と軍隊の圧力を強めるきっかけになったともいえる。

二

「大正」という年号は、明治天皇の代が長かったこともあって、わずか十五年（実際には十四年と五か月）しかない。一九一二年七月三十日に明治天皇が薨去したのに伴って皇太子・嘉仁王が踐祚したのだが、即位はそれから三年四か月ののち、一九一五年十一月十日までできなかった。

しかも翌年十一月には、皇后節子との間に誕生した廸宮（みちのみや）十六歳をもって皇太子（このとき名を「裕仁」と改めた）とし、二二年十一月、病を理由に皇太子を摂政に任じた。

まず前例がない。

大正天皇の即位がずっとあとだったのは、「明治大帝の諒闇」（服喪）のためであったとされている。だがそれは表向きの理由に過ぎない。明治天皇が即位したのは孝明天皇薨去から二年後の一八六八年八月二十八日だったし、昭

和天皇の即位も踐祚から二年後の一九二八年十一月十日だった。

嘉仁王が即位の式典を三年四か月も待たされたのは、「大正政変」と呼ばれる平和的クーデターが起こっていたためであった。それは、政党と軍部の駆け引きのかたちで展開された。

明治末の十余年は、桂太郎と西園寺公望が交互に政権を担った。

- ・一九〇一年六月二日―〇五年十二月二十一日 桂太郎。
- ・一九〇六年一月七日―〇八年七月四日 西園寺公望。
- ・一九〇八年七月十四日―一一年八月二十五日 桂。
- ・一九一一年八月三十日―一二年十二月五日 西園寺。
- ・一九一二年十二月二十一日―一三年二月十一日 桂。

桂太郎は弘化四年（一八四七）長州に生まれ、幼名を「寿熊」といった。「寿熊」は「ながくま」と訓む。

文久三年（一八六三）、高杉晋作の下で馬関戦争に従軍し、明治に入ってドイツに留学した。帰国して陸軍大尉、のち参謀本部でドイツ兵制に準拠した軍令・軍政を整え、陸軍次官として山県有朋、大山巖（いわお）を補佐した。なかなか憎めなかった人であつたらしい。

三省堂『日本人名辞典』には、

巧妙な人心収攬策はその肥満福相とあいまって（ニコボン内閣）とあだなされ、官僚と政党内、大ブルジョア間の橋渡しを果たした。

とある。

笑顔で「頼むよ」、ポンツと肩を叩かれると、反対派も懐柔された、ということであろう。一九一三年十月没。

一方の西園寺公望は嘉永二年（一八四九）、九清華家の一である徳大寺公純の次男に生まれ、西園寺家の養子となった。フランスのソルボンヌ大学に学び、維新政府では参与。一八七一年に再びフランスへ渡り、このとき中江兆民と親しく交わった。

八一年に帰国して明治法律学校（のちの明治大学）を創設し、同じ年に「東洋自由新聞」を興した。第二次、第三次伊藤博文内閣で文相、一九〇〇年政友会創立に参加し〇三年総裁。一九四〇年十一月に没し、国葬が執り行なわれた。

コトは第二次西園寺内閣の一九一二年十二月二日に起こった。

かねて陸軍が強く要求していた二個師団増設の案件を、

議会が否決した。このため、陸軍大臣・上原勇作が辞表を提出したのである。

西園寺は事態の收拾を図ろうとしたが後任大臣が決まらなかったために互解し、陸軍は内大臣に退いていた桂を起用した。

陸軍の師団増設には、財界が反対だった。

東京の新聞・雑誌記者が「憲政策振会」を結成して、師団増設反対のキャンペーンを張り、桂が第三次内閣を発足させる二日前には第一回の憲政擁護大会が東京・歌舞伎座で開かれた。

翌一月十七日、全国記者大会が催され、ここで「憲政擁護・閥族掃蕩」が決議され、同月二十四日の第二回憲政擁護大会を経て二月十日、議会を数千の民衆が包囲して暴徒化した。

彼らは警官隊と衝突したばかりでなく、当たるを幸いに騎虎の勢いで新聞社や交番を襲撃した。一九〇五年九月五日に発生した日比谷焼き討ち事件が再現された。この動きは大阪、神戸、広島、京都などにも広がり、このために桂は総辞職に追い込まれた。

民衆の力が内閣を倒したという意味から、「大正デモクラシー」を象徴する事件とされている。

だが果たして、真のデモクラシーであったかどうか。

三

憲法擁護運動は米騒動が起る五年前の出来事だが、民衆が集団をなして暴徒化し、これがたちまち全国に波及するところなど、共通するところが少なくない。憲法擁護の集会は大阪、香川、福島、宮城、岩手など全国で開かれていたから、火の手が上がるのも早かった。

しかしこの運動が純粹に民衆によつて起こされたかという、甚だ疑問が残っている。

そもその発端は陸軍が要求した師団増設問題であつて、それに反対したのは財界であつた。特に三井財閥は交詢社を中核に桂内閣の打倒と元老の排除を決意し、新聞記者と政党政治家を動員して一大キャンペーンを展開した。

第一回憲法擁護大会では、

閥族の横暴跋扈今や其極に達し憲政の危機目睫に迫る。吾人は断固妥協を排して閥族政治を根絶し、以て憲政を擁護せんことを期す。

— という声明を決議した。だが実態としてその内容は、交詢社の意思を反映したものだつた。

大久保利通の孫で侯爵・貴族院議員でもあつた大久保利謙は、

——ブルジョアジーと政党が手を結んだ同盟戦線の成果にほかならない。

と厳しく断じている。

桂に代わつて政権の座に就いたのは薩州閥を背景にした海軍の山本権兵衛で、政友会を味方に取り込むことに成功した。陸軍はすぐさま反撃を開始した。翌一四年二月二十三日、横浜毎日新聞の創業者で立憲同志会の議員である島田三郎をして、ドイツのシーメンス社が海軍高官に贈賄していた事実を暴露、次いでイギリスのニッカーズ社および三井物産と海軍との癒着を攻撃した。

三井物産ならびに交詢社、政友会はここで防戦に回らず、山本内閣と物産役員を犠牲にしてなお憲法擁護運動を盛り上げた。結果としてライバル政党であつた立憲同志会（一九一五年十月「憲政会」に改称）に政権は譲つたものの、旧藩閥、軍閥の抑制に成功した。

山本権兵衛のあとを受けて首相に就任した大隈重信は、多分に帝国主義的色彩の強い思想の持ち主であつて、三菱財閥との関係が強かつた。しかし第一次大戦で対独宣戦を布告した手前、連合国軍が一樣に標榜する「デモクラシー」に賛同せざるを得なかつた。

こうした状況の下で、一九一六年（大正五）、東大教授の吉野作造が、雑誌『中央公論』一月号に長論文「憲政の本義を説いて其有終の美の済すの途を論ず」を発表した。彼は第一次大戦直前のヨーロッパ留学で得た体験をもとに、「政治とは、一般民衆の利福を目的としなければならぬ」「政策の決定には一般民衆の意向を反映しなければならぬ」と説いた。

これに対して社会主義者の山川均が

——吉野論文は主権の所在を曖昧にしている。と指摘し、批判した。

今日の視点に立てば当然の批判であった。

だが吉野論文は、封建的制度和慣行を平和裏に、かつ積極的に改革する現実的な思想としてインテリゲンチヤに広く受け入れられた。資本家と政党と軍部が利権をめぐる三つ巴で足を引っ張り合う際の道具として使われてきた「デモクラシー」は、ここにおいて初めて思想的骨格を与えられることになった。

真つ先に反応したのは学生たちだった。東京帝国大学の進歩的學生が「新人会」を結成して社会改造運動をスタートさせたのははじめ、早稲田大学で「民人同盟」「建設者同盟」が発足し、これがのちの學生運動につながったほか、第一次大戦をきっかけとする空前の好況に反して一向に改

善されない就労環境への意識改革を促した。

労働組合の結成とストライキの多発と並行して、吉野が唱えた「民本主義」は農民運動とも結びつき、テーマは政治改革から社会問題に広がった。鈴木文治が結成した労働者組織「友愛会」は、労働者の品性・教養を高めることで労使の協調を訴え、資本家は労働問題の「安全弁」としてこれを歓迎した。

その友愛会の思想的骨格をなしたのは、賀川豊彦である。一九二七年にアメリカ留学から帰国し、神戸の貧民窟に入ってキリスト教の伝道をしている中で鈴木文治と知り合った。一九二〇年（大正九）に刊行した『死線を越えて』がベストセラーとなり、以後、友愛会の指導的地位にあった。しかし第一次大戦後の不況が、労使協調路線を変えた。

一九二一年に神戸で起こった三菱内燃機工場および、川崎造船所、神戸三菱造船所、三菱電機工場のストライキで、労働者を暴力団が襲撃して数十人の負傷者を出し、さらに歩兵二個大隊と水兵二百人、憲兵数十人が出動するに及んで、労働組合は闘争的組織に変質していく。

軍隊が出動し実弾を発砲するというのは、一九一九年三月一日から三か月にわたって繰り広げられた朝鮮半島における抗日・反日暴動（三・一独立運動）と無縁ではない。政府は日本人であろうと朝鮮人であろうと、抵抗を強く示

す者たちを武力で沈黙させる手法を採用したのだ。

この手法は最初は「止むを得ない措置」として実行されたかもしれないが、やがて政府や軍の常套手段となり、そのうち手段でなく体質になっていく。

一方、人道的見地から貧困問題に取り組んだ河上肇は「大阪毎日新聞」に連載した『貧乏物語』でマルクス主義的唯物史観を提示し、農本主義の立場から大地主と小作の問題を論じるうち、マルキシズムを鮮明に打ち出すようになる。

補注

山本権兵衛 やまもと・ごんべえ／1852～1933。薩摩（鹿児島県）に生まれ、一八七四年にドイツ戦艦で世界一周を果たした。九〇年「高千穂」艦長となり日清戦争に従軍、一八九八年第二次桂太郎内閣で外相、日露戦争では戦争回避論を唱えた。一九一三年首相、二三年に二度目の首相に就任し外相を兼務したがアーキストの難波大助が起こした皇太子狙撃事件の責任を負って辞任した。伯爵。

島田三郎 しまだ・さぶろう／1852～1923。江戸（東京都）に生まれ、昌平黌に学んだ。一八七四年（明治七年）「横浜毎日新聞」を興し、主筆として活躍した。一八八一年大隈重信らと立憲改進黨を結成し、九〇年から連続十四回、国会議員を務めた。雄弁家であつて、あだ名は「鈴木しゃべ郎」だった。足尾鉾山鉾毒事件の被害者を支援するなど社会活動家でもあつた。

大久保利謙 おおくほ・としあき／1900～1995。大久保利通の孫で貴族院議員を務めた。母方の祖父は日清汽船、日本郵船の社長を務めた近藤廉平（1848～1921）。

交詢社 こうじゆんしゃ・一八八〇年、福沢諭吉の提唱で結成された社交機関で、その目的は「知識ヲ交換シ世務ヲ諮詢スル」とある。創立当初から学術研究者、官吏、商業・農業など広範な分野の会員が参加した。慶応義塾大学卒業生が多く就職した三井財閥との関係が強まった。

吉野作造 よしの・さくぞう／1878～1933。宮城県に生まれ、東京帝国大学を出て清王朝に招かれ政治機構の近代化を指

導した。帰国後、東京帝大助教、一九一四年教授。「中央公論」を中心に文筆活動を展開した。

山川 均 やまかわ・ひとし／1880～1958。岡山県に生まれ、同志社大学中退後、上京して雑誌「生年の福音」を創刊した。一九〇六年「日本社会党」の結成に参加し、「平民新聞」を創刊した。一九二六年、堺利彦などと雑誌「新社会」を創刊、一八八年に荒畑寒村（1887～1981）と「労働組合研究会」を発足、二〇年「日本社会主義同盟」に参加するなどボルシェビズムに傾いた。二二年「共産党」（第一次）に参加、二三年に逮捕・起訴され、「思想的危険人物」のレッテルを貼られた。第二次大戦後は社会党左派の思想的指導者となった。

鈴木文治 すずき・ぶんじ／1885～1946。宮城県に生まれ、東京帝国大学を出て出版社「秀英社」をへて「東京朝日新聞」に勤めた。一九一一年（明治四十四）ユニテリアン教会の社会事業部長となり、労働者を対象にした共済事業組織「友愛会」を結成した。これが一九年の「日本労働総同盟友愛会」を経て二一年「日本労働総同盟」に発展した。第二次大戦後は反共主義の立場で労働運動を指導したが、四六年の第一回総選挙の遊説中、仙台で没した。

賀川豊彦 かがわ・とよひこ／1888～1960。兵庫県に生まれ、アメリカ・プリンストン大学を出て一九一七年に帰国した。中学時代にキリスト教の洗礼を受け路傍伝道を行うなど宗教者としての体験から、帰国後も神戸の貧民窟で無料の巡回診療を行った。友愛会に参加し、一九一九年発足の「関西労働同盟」で理事長、川崎・三菱神戸造船所の労働争議を指導した。第二次大戦後、勅選議員となり、日本社会党の結成に参加した。川崎・三菱

神戸造船所の労働争議のとき、労働組合と関西労働同盟事務局の間をつなぐ連絡係を大宅壮一が務めていたという逸話もある。

河上 肇 かわかみ・はじめ／1879～1946。山口県に生まれ、東京帝国大学を出て農科大学（のち東京大学農学部）や学習院講師となった。一九〇五年（明治三十八）に発表した論文「社会主義評論」（ペンネーム「千山万水楼主人」）で論壇にデビューし、田口卯吉の自由貿易論に対して保護貿易論を展開した。『貧乏物語』はヨーロッパ留学から帰国し京都帝国大学教授だったとき、「大阪朝日新聞」に連載したものだ。

日本IT書紀 036 大正デモクラシー

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。